京都大学大学文書館 企画展

屏風に名を残した教員たち

京都大学大学文書館

目　次

ごあいさつ
屏風とその由来―― 2
名を残した人々(1)　荒木寅三郎・濱田耕作―― 4
名を残した人々(2)　内藤虎次郎（湖南）・河上　肇―― 6
名を残した人々(3)　藤浪　鑑・朝永正三―― 8
名を残した人々(4)　森外三郎・前田　鼎―― 10
書かれた時代―― 12
年表　1920年前後の「大学改革」―― 13
人物一覧―― 14
史料読み下し―― 20
京都帝国大学建物配置図（1922年頃）―― 21

京都大学大学文書館では、このたび企画展「屏風に名を残した教員たち」を開催し、合わせてこの展示図録を発行することになりました。展示室で資料をご覧になり、さらにこの図録を読み返していただくことで、京大史の一コマを味わっていただけましたら幸いに存じます。

京都大学大学文書館

開催期間　2012年11月6日(火)～2013年1月20日(日)
場　　所　京都大学百周年時計台記念館1階　歴史展示室
開催時間　9：30～17：00
休 館 日　12月3日、12月28日～1月3日、1月7日

屏風に名を残した教員たち

ごあいさつ

今回の企画展では、昨年度大学文書館に寄贈された一隻の屏風を取り上げます。屏風には35枚の色紙が貼り込まれており、そこに記されているのは京大創立からまもなく創業された理髪店「美留軒」をひいきにしていた京大教員たちの名前です。彼らは戦前の京大を代表する研究者たちだったと言えましょう。本展示では、彼らに関連する資料や色紙が書かれた時代にも焦点を当て、京大史のひとコマを振り返ってみます。

屏風をご寄贈下さった「美留軒」店主の上田浩一様に改めてお礼申し上げます。

2012年11月

京都大学大学文書館長

林　信夫

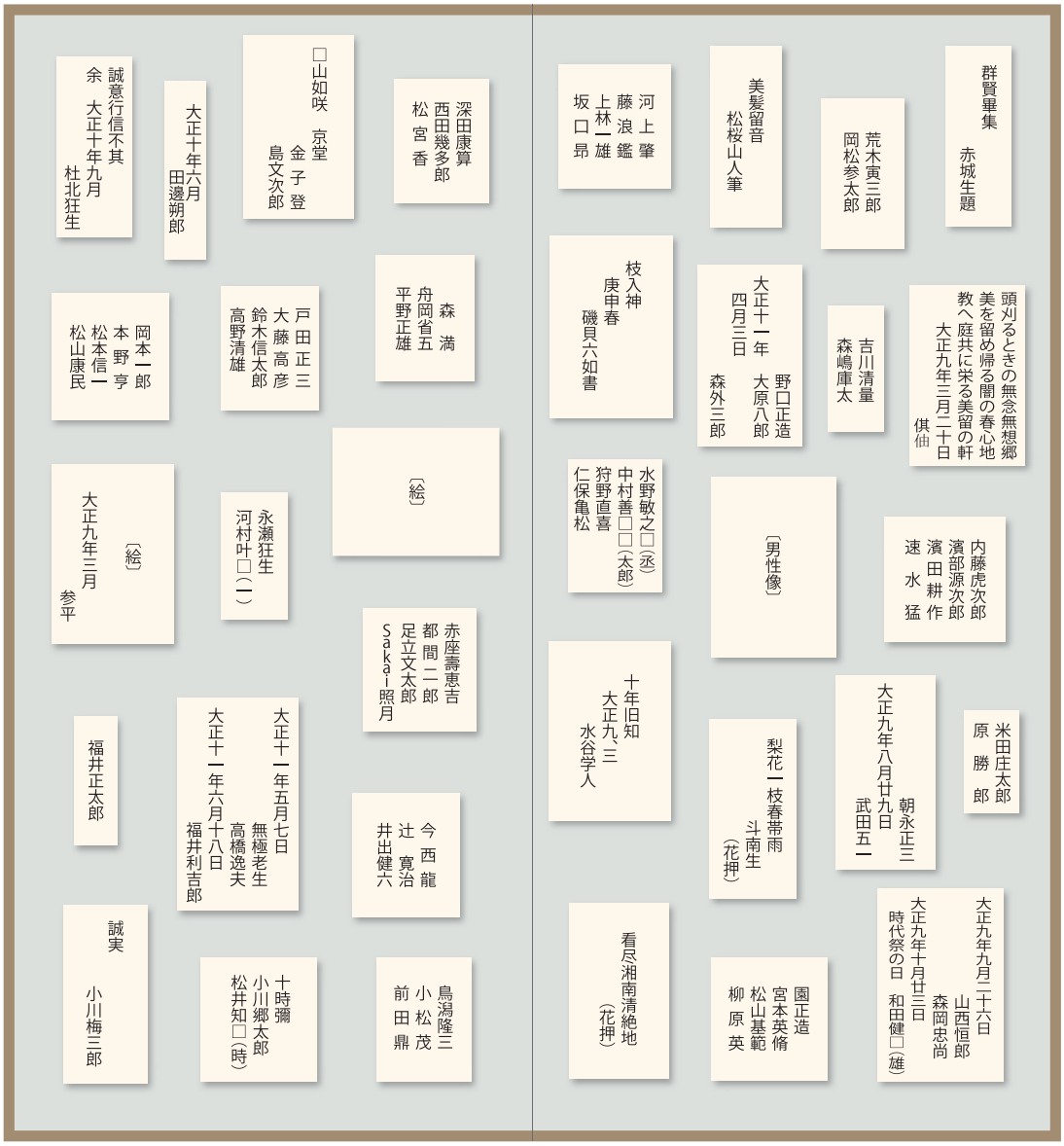
（撮影：京都通信社）

屏風とその由来

2011年12月、京大吉田南構内の東隣に店を構える理髪店「美留軒」より、大学文書館に一隻の屏風が寄贈された。屏風には35枚の色紙が貼り込まれており、その大部分は署名で、合計74の人名が確認できる。そのうち、49が京大の教員経験者、4が事務職員、6が卒業生で京大以外に就職した者、4が三高教員であることが判明した。

「美留軒」の創業は、京大創立2年後の1899年。当時から京大・三高の学生生徒・教員が通っていたこの店に、こうした屏風が保管されているのは「知る人ぞ知る」事実であった。

屏風が仕立てられた経緯や時期は明らかではないが、9枚ある日付の記された色紙がいずれも1920年代前半のものであることから、色紙の多くはこのあたりの時期に書かれた可能性が高い。



名を残した人々(1)

荒木寅三郎 *(1866～1942)*

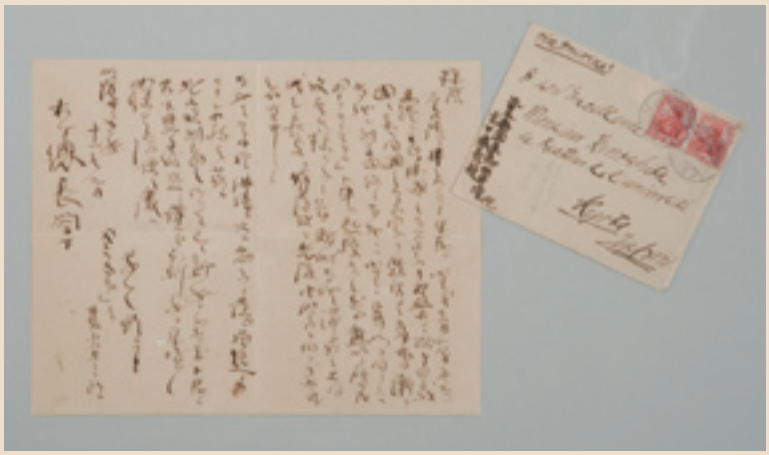
上野国(現群馬県)出身。ドイツ留学、第三高等学校教授を経て、1899年京都帝国大学に医科大学(現医学部)が設置されるとともに教授に就任、医化学講座を担当した。1903年医科大学長(現医学部長)に、ついで1915年には京都帝国大学総長に就任した。再任となった1919年には、初の教授による学内公選で総長に推薦されている。また、1929年の退任までの在任13年9ヵ月は、京大歴代総長のみならず他の帝国大学も含めた総長在任の最長である。在任の前半では、大正デモクラシー期における様々な改革や新学部・研究所の設置などに手腕を振るい、後半には次第に強まる思想統制のなかでの大学の舵取りを行った。

幼少期から漢文を学び、長じては漢詩をよく作り「鳳岡」と称した。この縁で東洋史の内藤湖南、狩野直喜らとの付き合いも深かった。

濱田耕作 *(1881～1938)*

大阪府出身。東京帝国大学を卒業後、1909年に京都帝国大学文科大学(現文学部)講師に就任、設置が予定されていた考古学講座の準備として考古資料の収集を行った。1913年助教授に就任、1916年には新設された全国初の考古学講座の担任となり、翌年教授となった。全国各地の古墳や貝塚などの遺跡の実地調査を行った報告を『京都帝国大学文学部考古学研究報告』(全16冊)としてまとめ、遺跡の科学的調査の手法を身を以て示した。

1930年に文学部長、1937年には京都帝国大学総長に就任した。就任直前に起こった職員の横領事件をうけ「粛学に邁進」したが、体調を崩して入院、翌1938年には交流のあった医学部教授の刑事事件に衝撃を受けて辞意を表明、同年7月現職のまま死去した。

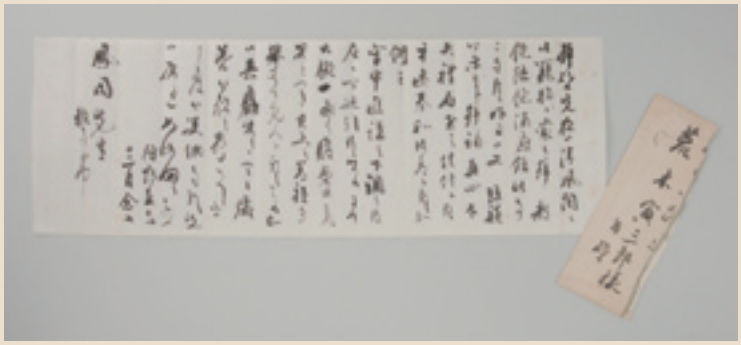


木下広次宛荒木寅三郎書簡

医科大学教授就任後渡欧した荒木が、木下総長宛に送った書簡。フランス、ベルギーの大学を訪問したのち、ドイツのストラスブルクに着いたことを報告している。荒木にとってストラスブルグは二度目の訪問であり、京大での医化学教室設計の際、若き日に留学していたストラスブルク大学の生理学教室に範をとったほど、影響を受けていた。

大正五年宣誓式式辞

荒木が総長に就任して2回目の宣誓式（現在の入学式）における式辞。理想を高く持ち、「目前ノ利害」にとらわれるな、と説いている。



荒木寅三郎宛狩野直喜書簡

荒木は、狩野や内藤湖南らとともに漢詩を詠む会を開いていた。手紙冒頭の「先夜ハ清風閣ニ御寵招ヲ蒙リ」とは、そのことを指すと考えられる。

荒木寅三郎宛濱田耕作書簡

両人の間も交流があった。出張先の熊本県人吉から送られた新年の挨拶。

濱田耕作自筆の色紙

濱田は、絵画や写真などにも造詣が深かった。この色紙は総長時代の台湾旅行時に描かれたものと思われる。「丁々と杣のうつ斧／こゑやみて／こだましつゝも／たふるゝ老木／阿里山にてよめる」とある。

濱田耕作愛用の硯

内藤虎次郎(湖南) *(1866 ～ 1934)*

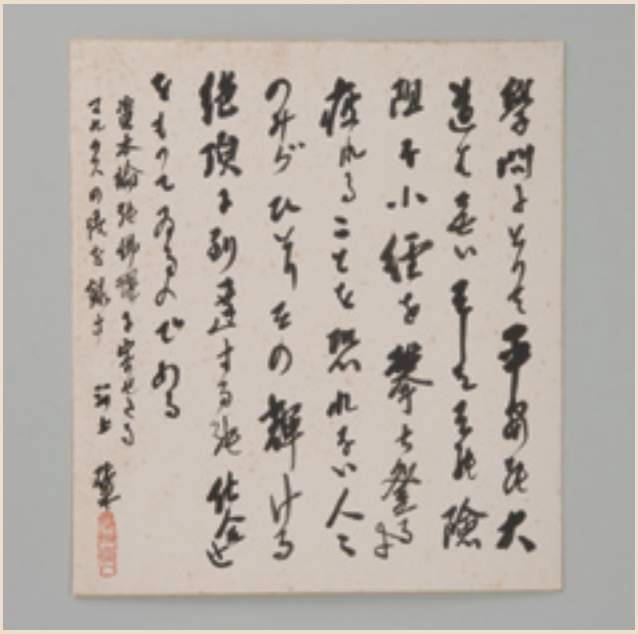
出羽国(現秋田県)出身。秋田県師範学校卒業後大阪朝日新聞記者などを経て、1907年京都帝国大学文科大学講師、東洋史学講座を担任し、1909年に教授に就任した。当時としては異色の経歴での就任であった。王朝ごとの断代史であった従来の中国史観を破り、文化史の観点から宋代以降を近世史とする説を唱えるなど、中国史を全体として捉える視点をもち、「京都支那学」の代表的人物となった。

河上　肇 *(1879 ～ 1946)*

山口県出身。東京帝国大学卒業後、1908年京都帝国大学法科大学(現法学部)講師、翌年助教授、1915年教授に就任、経済学第四講座を担任し、1919年経済学部の分離設置にともない河上も異動した。人道主義から次第にマルクス主義に傾倒するようになり、思想統制が強まるなか、1928年に荒木総長の要請と経済学部教授会の決議により教授を辞職した。その後実践活動に入るが、1933年に検挙され4年近く獄中にあった。書画や短歌、漢詩などに親しみ、美留軒の主人とは個人的にも深く付き合っていた。

荒木寅三郎宛内藤虎次郎書簡

ロンドンに滞在していた内藤よりの絵はがき（1924年9月）。大英博物館を見学したことなどが書かれている。



河上肇自筆の色紙

河上も詩歌、絵画、書などを楽しみ、狩野直喜や佐々木惣一らと画家の津田青楓を囲む「翰墨会」と称する集まりをもっていた。「学問にとりて平安の大道は無い」で始まるこの色紙は、河上の学問に対する厳しい姿勢をよく示している。

学連事件に関する花田大五郎学生監から荒木宛の報告

1925年12月、京大や同志社大の社会科学研究会に属する学生が検挙された。内地での治安維持法最初の適用事件であり、「左傾」思想への抑圧が本格化してきたしるしでもあった。河上の自宅も捜索されている。

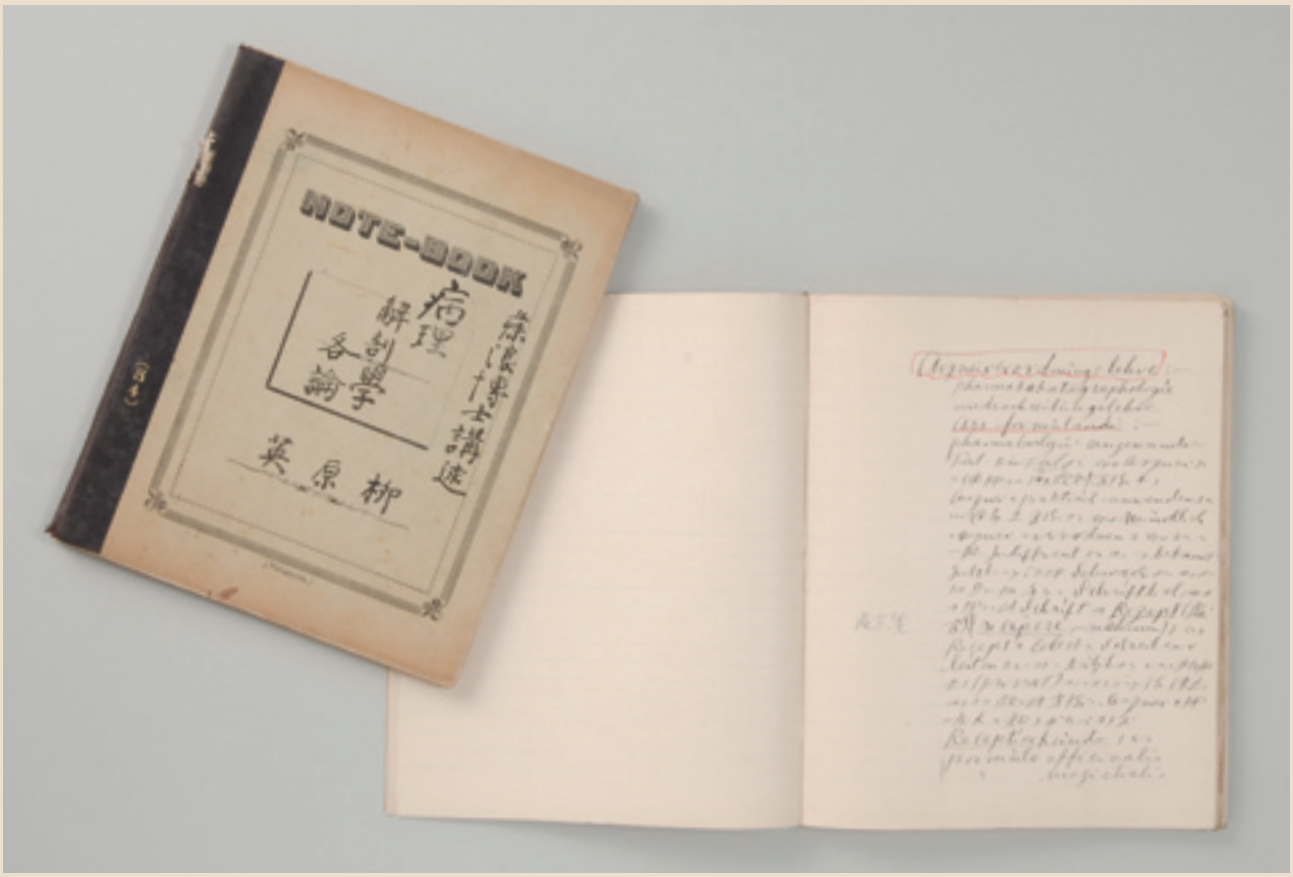
名を残した人々(3)

藤浪　鑑 *(1870～1934)*

尾張国(現愛知県)の藩医の家の出身。帝国大学卒業後ドイツに留学し、1900年京都帝国大学医科大学(現医学部)教授に就任、病理学講座を担任した。寄生虫である日本住血吸虫の研究で帝国学士院賞を受賞したほか、藤浪肉腫と言われる家鶏肉腫の研究で広く知られた。

朝永正三 *(1865～1942)*

肥前国(現長崎県)出身。工部大学校、帝国大学を卒業後ドイツおよびイギリスに留学、1898年京都帝国大学理工科大学(現理学部・工学部)教授に就任、はじめ機械工学第三講座、のち同第一講座を担任した。熱機関を主分野として研究・講義を行った。弟の三十郎は文学部で哲学史を研究し、三十郎の子振一郎は物理学を研究、日本で二人目のノーベル賞受賞者となった。



柳原英受講ノート

柳原も屏風に名を残している。このノートは柳原の京都帝国大学医科大学在学中のもの。藤浪鑑教授の病理解剖学各論と森島庫太教授の処方学。

朝永正三受講ノート

朝永は東京帝国大学工学部の前身である工部大学校で学んでいた。これらはその頃のノート。

名を残した人々(4)

森　外三郎 *(1865 ～ 1936)*

加賀国(現石川県)出身。帝国大学卒業後第三高等学校教授、学習院教授を経てイギリスなどに留学、1911年に京都府立第一中学校(現洛北高校)の校長に就任した。図書館の運営を生徒に任すなど自由主義的な教育で知られた。1922年第三高等学校長に転じ、一中同様生徒の個性を重んじる教育を目指したが、社会の軍国主義化とそれに反発する左翼生徒の板挟みの状況に立たされ、1930年に辞任した。なお、湯川秀樹・朝永振一郎は、一中と三高の両方で森の指導を受けた。

前田　　鼎 *(1886 ～ 1961)*

滋賀県出身。京都帝国大学医科大学(現医学部)卒業後、1915年京都帝国大学医科大学助教授、1919年に教授に就任、荒木寅三郎に次いで医化学講座を担任した。医学部長を務めた後、1941年に京大教授兼任のまま第三高等学校長に就任した(兼任はのちに解除)。1946年12月の退任まで、勤労動員や学徒出陣により教育が崩壊していった戦時期、適格審査や学制改革に見舞われた敗戦直後、という激動の時期に三高を率いた。

第三高等学校共済会規約

森外三郎が校長を務めていた1927年2月、三高生の経済生活の相互扶助を目的に共済会が設置された。
不況の深刻化という社会状況を背景としながら、生徒主導による設置は生徒自治の進歩も示していた。
美留軒利用のための切符も取り扱っていたという。

時計台屋上から見た第三高等学校

時計台竣工間もなくの撮影かと思われる。新徳館、尚賢館、木造だったころの本館、グラウンド、寄宿舎などが見える。

勤労動員関係資料

戦争末期になると、三高からも多くの生徒が勤労動員に駆り出され、授業も満足に受けられない状態になっていった。

書かれた時代

色紙の多くが書かれたと考えられる1920年代前半は、京大をはじめ日本の大学にとって大きな「改革の時代」だった。第一次大戦後の1918年12月には大学令が公布され、初めて公立・私立大学および単科大学が認められ、それと同時に、当時の原敬内閣によって高等教育機関の大拡張が実施されていた。

京大では、1919年に卒業式が廃止され（1927年に復活）、1921年には従来の9月入学から4月入学に移行、1923年には停年制（60歳）が施行されるなど、今日にもつながるような制度改革が次々と実施された。また、経済学部（1919年）、農学部（1923年）と新学部の設置も相次いだ。

折柄、創立25周年（1922年）を迎えた京大では、その記念に同窓生の社交の場として楽友会館が3年後の1925年に竣工し、その同じ年に時計台も竣工するなど、キャンパスも今日の姿に少しずつ近づいていった。

学年開始変更に関する史料

明治初期の学校制度設立時には、学校はおおむね9月始まりだったが、次第に4月始まりに移行し、1921年に高等学校が4月始まりになるのと合わせて大学も変わることになった。これは変更を求める文部省からの依頼文書。（『文部省往復書類』）

退職教授優遇策

従来停年制のなかった帝国大学においては、この時期に退職教授の優遇を条件に導入されるようになった。京大では1923年に60歳停年制が取り入れられた。（『評議会議事録』）

年表 1920年前後の「大学改革」

年	月	日	事　項
1918	12	6	大学令公布。分科大学に代わる学部の設置、公立・私立大学および単科大学の設置などを規定。
1919	2	7	京都帝国大学の法・医・工・文・理の各分科大学を学部に改称。
	5	23	初の総長選挙の結果、荒木寅三郎を選出。
	5	29	経済学部設置。
	6	5	評議会、優等卒業生・特待生制度および卒業式の廃止を決定。
	—	—	この年、医学部選科に女性2名入学（京大初の女性入学者）。
1920	2	5	最初の私立大学として慶応義塾大学・早稲田大学の設立が認可される。
	7	6	学位令公布。大学による学位の授与など規定。
	—	—	この年度より農学部用地として北部構内の購入開始。
1921	1	20	通則改正。学年開始を9月から4月へ移行。
	2	3	評議会、名誉教授推薦内規決定。
	3	26	学位規程達示。
1922	2	15	通則改正。京都帝国大学祝日を3月1日から6月18日に変更。
	6	5	工学部建築学教室竣工。
	6	18	創立二十五周年記念式挙行。式終了後、園遊会開催。6.19学内開放（～6.20）。
	12	14	アインシュタイン来学。
1923	3	13	評議会、在職教授退職ニ関スル申合決定（停年制施行）。
	11	28	農学部設置。
1924	3	1	学生健康相談所開設。
	6	18	農学部グラウンドにおいて、学友会主催の園遊会開催。以後5月第三日曜日に開催。
	9	25	農学部表門および門衛所竣工。
	10	23	東大・京大各運動部の対抗競技会を開催（初の「運動週間」）。
1925	4	13	陸軍現役将校学校配属令公布。大学の希望があれば、軍事教練を行う陸軍将校の配属が可能と規定。 7.9評議会、希望者に限った軍事教練の実施を決定。
	4	15	学友会新聞部『京都帝国大学新聞』創刊。
	5	17	楽友会館開館。
	12	1	京都府警察部、京大・同志社大の社会科学研究会会員の私宅や寄宿舎を家宅捜索、36名を検束（京都学連事件）。
	—	—	時計台竣工。

楽友会館

時計台

楽友会館絵葉書
竣工を記念してつくられたもの。現在でも竣工当時の雰囲気をよく残している。

田島錦治 *(「赤城」は田島の雅号、1867～1934)*
武蔵国出身。帝国大学法科大学卒業、1900年京都帝国大学法科大学教授(経済学第一講座)、1919年経済学部教授。1927年退職後、立命館大学長を務める。

荒木寅三郎
4頁参照。

岡松参太郎 *(1871～1921)*
熊本県出身。帝国大学法科大学卒業、1899年京都帝国大学法科大学教授(民法第一講座)。教授在任中から南満州鉄道株式会社理事に就任、1913年京大を退職。

河上肇
6頁参照。

藤浪鑑
8頁参照。

上林一雄 *(1882～1969)*
京都府出身。京都帝国大学工科大学卒業、1919年工学部講師、1926年旅順工科大学教授。

坂口昂 *(1872～1928)*
兵庫県出身。東京帝国大学文科大学卒業、第三高等学校教授などを経て1907年京都帝国大学文科大学助教授、1912年教授(史学地理学第三講座)。在職中死去。

野口正造
不明。

大原八郎
1910年京都帝国大学医科大学卒業、東北帝国大学医科大学助教授、福島市大原病院長など。

森外三郎
10頁参照。

磯貝六如
不明。

内藤虎次郎(湖南)
6頁参照。

濱部源次郎 *(1881～1939)*
鳥取県出身。京都帝国大学理工科大学卒業、1910年理工科大学助教授、1917年工科大学教授(機械工学第四講座)。

濱田耕作
4頁参照。

速水猛 *(1873～1923)*
長野県出身。東京帝国大学医科大学卒業、1903年京都帝国大学医科大学助教授、1907年医科大学教授(病理学病理解剖学第二講座)。

水野敏之丞 *(1862～1944)*
山城国出身。帝国大学理科大学卒業、第三高等学校教授などを経て1898年京都帝国大学理工科大学助教授、1902年教授(物理学第一講座)。

中村善太郎 *(1879～1932)*
京都府出身。東京帝国大学文科大学卒業、1907年第三高等学校教授、1922年東北帝国大学法文学部教授。

狩野直喜 *(1868 ～ 1947)*
肥後国出身。帝国大学文科大学卒業、1906年京都帝国大学文科大学教授（支那語学・支那文学講座）。

仁保亀松 *(1868 ～ 1943)*
伊勢国出身。帝国大学法科大学卒業、1900年京都帝国大学法科大学教授（法理学講座）。

米田庄太郎 *(1873 ～ 1945)*
奈良県出身。米国コロンビア大学などで研究、同志社高等科教授などを経て1920年京都帝国大学文学部教授（社会学講座）。

原　勝郎 *(1871 ～ 1924)*
陸中国出身。東京帝国大学文科大学卒業、第一高等学校教授を経て1909年京都帝国大学文科大学教授（史学地理学第一講座）。

朝永正三
8頁参照。

武田五一 *(1872 ～ 1938)*
広島県出身。東京帝国大学工科大学卒業、東京帝国大学工科大学助教授、京都高等工芸学校教授などを経て1920年京都帝国大学工学部教授（建築学第二講座）。

斗　南
不明。

水谷学人
不明。

山西恒郎 *(1886 ～ ?)*
三重県出身。東京帝国大学法科大学卒業、南満州鉄道株式会社総務部長、北支那開発副総裁、興中公司社長など歴任。

森岡忠尚 *(1876 ～ ?)*
奈良県出身。愛国生命保険会社取締役など。

和田健雄 *(1882 ～ 1944)*
山形県出身。京都帝国大学理工科大学卒業、1908年理工科大学助教授、1920年理学部教授（数学第三講座）。

園　正造 *(1886 ～ 1969)*
京都府出身。京都帝国大学理工科大学卒業、1913年理工科大学助教授、1921年理学部教授（数学第四講座）。

宮本英脩 *(1882 ～ 1944)*
茨城県出身。東京帝国大学法科大学卒業、大阪地方裁判所部長などを経て1916年法科大学助教授、1921年法学部教授（刑法刑事訴訟法第二講座）。

松山基範 *(1884 ～ 1958)*
大阪府出身。京都帝国大学理工科大学卒業、1916年理科大学助教授、1922年教授（地質学第一講座）。

柳原　英 *(1887 ～ ?)*
広島県出身。京都帝国大学医科大学卒業、大連医院皮膚科医長などを経て1943年京都帝国大学医学部教授（泌尿器科学講座）。

深田康算 *(1878 ～ 1928)*
山形県出身。東京帝国大学文科大学卒業、1910年京都帝国大学文科大学教授（美学美術史講座）。

西田幾多郎 *(1868 ～ 1945)*
能登国出身。帝国大学文科大学選科卒業、学習院教授などを経て1910年京都帝国大学文科大学助教授、1913年教授（宗教学講座、のち哲学哲学史第一講座）。

松宮　馨 *(1884 ～ 1927)*
京都府出身。京都帝国大学理工科大学卒業、1918年京都帝国大学理科大学助教授、在職中死去。

金子　登 *(1870 ～ 1952)*
伊予国出身。帝国大学工科大学卒業、第三高等学校教授などを経て1899年京都帝国大学理工科大学助教授、1905年教授（機械工学第三講座）。

島　文次郎 *(1871 ～ 1945)*
東京府出身。帝国大学文科大学卒業、1898年京都帝国大学法科大学助教授、最初の附属図書館長を務める。1906年文科大学助教授、1912年第三高等学校教授。

田辺朔郎 *(1861 ～ 1944)*
武蔵国出身。工部大学校卒業、京都府技師、工部大学校教授などを経て1900年京都帝国大学理工科大学教授（土木工学第二講座）。琵琶湖疏水の設計・施工にあたる。

杜　北
不明。

森　満 *(1880 ～ ?)*
京都府出身。京都帝国大学理工科大学卒業、埼玉県師範学校教諭などを経て1912年第三高等学校教授。

舟岡省五 *(1890 ～ 1974)*
東京府出身。京都帝国大学医科大学卒業、1916年医科大学助教授、1923年医学部教授（解剖学第三講座）。

平野正雄 *(1880 ～ 1951)*
和歌山県出身。京都帝国大学理工科大学卒業、1908年理工科大学助教授、1922年工学部教授（土木工学第五講座）。1938年総長事務取扱。

戸田正三 *(1885 ～ 1961)*
兵庫県出身。京都帝国大学医科大学卒業、1914年医科大学助教授、1916年教授（衛生学講座）。

大藤高彦 *(1867 ～ 1943)*
山城国出身。帝国大学工科大学卒業、第三高等学校教授を経て1897年京都帝国大学理工科大学助教授、1901年教授（材料強弱学講座、のち構造強弱学講座）。

鈴木信太郎 *(1874 ～ ?)*
千葉県出身。東京帝国大学文科大学卒業、清国北京大学教授、京都府立第四中学校長などを経て1923年京都帝国大学経済学部助教授および学生監、1927年弘前高等学校長。

高野清雄
不明。

岡本一郎 *(1881 ～ ?)*
山口県出身。京都帝国大学法科大学卒業、茨城県立商業学校長などを経て1915年京都帝国大学事務官、1921年書記官、1922年和歌山高等商業学校長。

本野　亨 *(1879 ～ 1951)*
京都府出身。京都帝国大学理工科大学卒業、1906年理工科大学助教授、1914年工科大学教授（電気工学第四講座）。

松本信一 *(1884 ～ 1984)*
福島県出身。京都帝国大学医科大学卒業、1913年医科大学助教授、1919年教授（皮膚病黴毒学講座）。

松山康民
1907年京都帝国大学法科大学卒業。

永瀬狂三 *(1877 ～ ?)*
愛知県出身。東京帝国大学工科大学卒業、1909年京都帝国大学建築工事設計及監督補助、1919年京都帝国大学技師、1920年営繕課長。

河村叶一
京都帝国大学医科大学卒業、1914年京都府立医学専門学校教授。

赤座寿恵吉
第三高等学校医学部助教授、京都府立医学専門学校教授など。

都 間 二 郎
不明。

足立文太郎 *(1865 ～ 1945)*
伊豆国出身。帝国大学医科大学卒業、第三高等学校教授などを経て1900年京都帝国大学医科大学助教授、1904年教授(解剖学第二講座)。

今 西　　龍 *(1875 ～ 1932)*
岐阜県出身。東京帝国大学文科大学卒業、1916年京都帝国大学文科大学助教授、1926年京城帝国大学教授。

辻　　寛 治 *(1879 ～ 1960)*
島根県出身。京都帝国大学医科大学卒業、1910年医科大学助教授、鹿児島県立鹿児島病院副院長を経て1917年京都帝国大学医科大学教授(内科学第一講座)。

井 出 健 六 *(1882 ～ 1927)*
長野県出身。東京帝国大学工科大学卒業、1911年京都帝国大学理工科大学助教授、1913年教授(採鉱学第二講座)。

成 瀬　　清 *(1885 ～ 1958)*
東京府出身。東京帝国大学文科大学卒業、第三高等学校教授などを経て1919年京都帝国大学文科大学助教授、1930年教授(西洋文学第一講座)。

高 橋 逸 夫 *(1888 ～ 1955)*
岐阜県出身。京都帝国大学理工科大学卒業、1915年工科大学助教授、1925年工学部教授(土木工学第一講座)。

福井利吉郎 *(1886 ～ 1972)*
東京府出身。京都帝国大学文科大学卒業、慶応義塾大学講師などを経て1924年東北帝国大学法文学部教授。

福井正太郎 *(1883 ～ ?)*
東京府出身。私立東京法学院卒業、長野県文部属などを経て1920年京都帝国大学事務官。

鳥 潟 隆 三 *(1878 ～ 1954)*
秋田県出身。京都帝国大学医科大学卒業、1906年医科大学助教授、大阪府立高等医学校教諭などを経て1922年京都帝国大学医学部教授(外科学第一講座)。

小 松　　茂 *(1883 ～ 1947)*
高知県出身。京都帝国大学理工科大学卒業、1911年理工科大学助教授、1920年理学部教授(化学第三講座)。

前 田　　鼎
10頁参照。

十 時　　彌 *(1874 ～ 1940)*
福岡県出身。東京帝国大学文科大学卒業、学習院教授を経て1916年第三高等学校教授、1923年広島高等学校長、1932年第五高等学校長。

小川郷太郎 *(1876 ～ 1945)*
岡山県出身。東京帝国大学法科大学卒業、1904年京都帝国大学法科大学助教授、1912年教授(財政学講座)。1917年より衆議院議員、1924年京都帝国大学退職、商工大臣、鉄道大臣などを歴任。

松 井 知 時 *(1870 ～ ?)*
東京府出身。東京帝国大学文科大学卒業、1910年第三高等学校教授。

小川梅三郎 *(1862 ～ 1941)*
東京府出身。帝国大学工科大学卒業、工科大学助教授を経て1899年京都帝国大学理工科大学教授(土木工学第三講座)。

学連事件に関する花田大五郎学生監から荒木宛の報告

大正十五年一月十五日
学生監　花田大五郎
総長荒木寅三郎殿
学生拘引ノ件ニツキ報告
本日午前七時半本学寄宿舎々生熊谷孝雄（経済学部学生二年）拘引セラレ候、拘引前午前七時頃、川端署高等警察係原田実治小職ノ官舎ニ来リ右拘引ニツキ拘引状ヲ示シ小職ノ諒解ヲ求メ候
右ト前後シテ左記十一名（熊谷トモ十二名）勾引サレ京都地方裁判所未決檻ニ収容サレシ模様ニ候
（文学士、大学院学生）淡徳三郎、（経）岩田義道、黒田久太、石田英一郎、栗原佑、永井哲二、白谷忠三、太田遼一郎、泉隆、（法）山崎雄次、橋本省三
一、文部省専門学務局長ヘハ電報致置候　以上、
追伸
一、右ノ外鈴木安蔵、池田隆両人ニモ令状発セラレ居レドモ両人行方不明ノ由ニ候、尚同志社大学生二名モ勾引サレ候由
一、東大学生若干名モ勾引サレ、京都ニ護送サレテ取調ベヲ受クルコトニナリ居ル由ニ候、（之ハ久保田特高課長ノ言ニテ候、多分既ニ勾引サレシコトト察セラレ候）
河上教授宅ヨリ引上ゲシ書類（大正十五年一月十五日午前九時）
一、唯物史観ノ略解（河上肇著）
（労働者問題叢書第十一篇）大正十一年発行
一、Marx, Wage-Labour and Capital（河上の日本訳アリ）
（大学図書館蔵）
一、Marx, Lohnarbeit und Kapital（河上氏蔵本）
（河上ノ日本訳アリ）
一、Engels, Grundsätze der Kommunisums
（後藤信夫氏ノ訳本アリ）
一、Lenin, Imperialismus（邦訳本アリ）（青野季吉訳）
一、社会科学研究会々員ヨリノ書簡数通
一、名刺一葉
一、産業労働調査所報告（謄写版）
一、プレットカルトノ理論及実際（公刊ノパンフレット）

学年開始変更に関する史料

発専二三二号
大正十年ヨリ高等学校学年開始期ヲ四月トシ同年ヨリ直ニ卒業期ヲ三月ニ変更可相成筈ニ有之候ニ就テハ貴学各学部ニ於テモ可成同年ヨリ右ニ準シ学年開始期ヲ四月ニ変更相成候ハヽ高等学校卒業者ヲ大学ニ進入セシムル関係上好都合ト存候処貴学ノ御都合如何ニ有之候哉承知致度此段及照会候也
大正九年一月八日
文部省専門学務局長松浦鎮次郎
京都帝国大学総長医学博士荒木寅三郎殿

荒木寅三郎宛濱田耕作書簡

京都市吉田町
万里小路
荒木寅三郎様

謹賀新禧
延引ながら出張先より
肥後人吉にて　濱田耕作

濱田耕作自筆の色紙

丁々と杣のうつ斧
こゑやみて
こたましつゝも
たふるゝ老木
阿里山にてよめる
濱田青陵

荒木寅三郎宛内藤虎次郎書簡

Dr. T. Araki Esq.
Kioto, Japan
via Amerika
日本
京都帝国大学
荒木寅三郎様

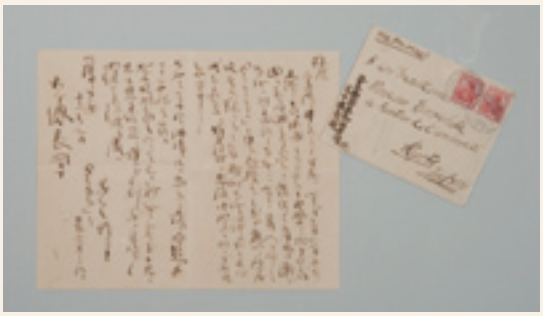
倫敦一ヶ月の滞在中三
週間ハ大英博物館にニ費
しスタインスコレクション及び太
平天国史料の閲覧写
真抄録等をすまし明
後再び巴里ニ帰市候
九月廿七日
内藤虎次郎

河上肇自筆の色紙

学問にとりて平安の大
道は無いそしてその険
阻な小径を攀ち登るに
疲れることを恐れない人々
のみがひとりその輝ける
絶頂に到達するの仕合せ
をもってゐるのである
資本論の仏訳に寄せたる
マルクスの語を録す　河上肇

史料読み下し

木下広次宛荒木寅三郎書簡



〔封筒表〕「Via Amerika!
A son Excellence
Monsieur Kinoshita,
le Recteur
de l'université
Kyoto Japon
大日本帝国京都市聖護院
木下総長殿」

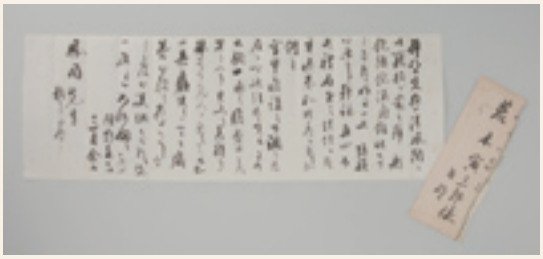
拝啓
益御清祥之御事と奉存候小生義去月十四日無事
馬港ニ着仏国之各大学ヲ視察シ次テ白義
国ニ参リ同国之各大学ヲ歴訪シ去月卅日漸ク
当地ニ到着致候当地ニハ小生ト専門ヲ同フスル
「ホーフマイステル」ト申ス教授有之至而熱心ニ研究
致居候様子ニ候間暫時当地ニ滞在之上同
氏ノ長処ヲ脩得致シ然後他地方ニ向テ出発
之心算ニ候
当地は今日猶仏語ヲ話ス者多ク従而独逸ニ入
リタル心持は不致候
此書状到着之頃は已ニ新年ト可相成ト存候
間乍略儀茲ニ謹而新年ヲ奉賀候
余は後便ニ譲候

草々頓首

明治卅五年十一月九日
「ストラスブルグ」ニテ
荒木寅三郎

木下総長閣下

荒木寅三郎宛狩野直喜書簡



〔封筒表〕「荒木寅三郎様
台啓」

拝啓先夜ハ清風閣ニ
御寵招ヲ蒙リ拝顔
飽徳飽酒感銘此事
ニ奉存候昨日ハ又瑶韻
御示被下拝誦再四乍
失礼眉玉之佳什ト存候
早速奉和致度ト存候処
例之
宮中進講之下調ヲ致
居候間延引仕候今日にて
大概一通り腹案出来候
筈ニつき其上ニ高韻ヲ
攀ちて見んト存候この品
ハ甚麤末ニ候へトモ歳
暮御祝之為メさし出
申度御受納奉願候先
ハ右迄如此匆々不一

狩野直喜

十二月念七

鳳岡先生
執事御中

京都帝国大学建物配置図（1922年頃）

京都大学大学文書館 企画展
屏風に名を残した教員たち

編集・発行　京都大学大学文書館
発　行　日　2012年11月6日
印　　刷　ヨシダ印刷株式会社